



勝野 雅央・ 名古屋大学 医学部長 (大学院医学系研究科長) 創基155年 インタビュー

名古屋大学が今年、創基155年を迎えた。医学部の前身、仮医学校が設置されて1世紀半を越え、発展を続けつつ医療界に多くの実績を残してきた。医療技術の進化、少子高齢化など社会環境が激変する中、地域をリードする高度医療機関としての信頼感は絶大だ。卓越した医学の教育研究拠点として今、どこを目指しているのか。勝野雅央・名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長に歴史に根差した医学部の現在と将来展望などを聞いた。

譲れぬ理念は 「最先端医学研究による新たな医療技術の創出」

—今年が創基155年目です。歴史上特筆すべき点は。

勝野雅央・名古屋大学医学部長 1871（明治5）年5月に藩校が設置されましたが、始まりは天然痘のワクチンを打つ場所、いわばワクチンクリニックで、仮医学校としてスタートしました。歴史上、様々な変革はありましたが、あえて言えば2つ挙げられると思います。1つは1939（昭和14）年、医学部と理工学部の2学部で名古屋帝国大学が発足し、病院は医学部附属病院と改称されました。歴史の大きな転換点でした。もう1つは2020年に岐阜大学と東海国立大学機構に法人統合して1機構2法人の形になったことです。これは困難なこともありました。少子高齢化で今後学生も減る中で大学として勇気をもって切り込みました。

—医療による地域貢献の歴史でもありました。

勝野医学部長 藩校の設置には名古屋出身

の植物学者で医学者の伊藤圭介さん（1803-1901）が尽力されました。最後の帝国大学として名古屋大学が発足した背景には、名古屋市民や地元財界による長年の強い熱望と、愛知県による巨額の寄附が大きかったと言われており、地域・市民が作った大学とも言えます。地域の人の健康を守ることが医学部の核にあり、地域に根差しつつ新時代に対応、世の中の役に立つ



医系研究棟、左から1号館・2号館・3号館